飯山市埋蔵文化財調査報告　第33集

田草川尻遺跡Ⅷ

TA KUSAGAWA JIRI　SITE

―― P・Q地点の調査 ――

1992・3

長野県飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第33集

田草川尻遺跡Ⅷ

TA KUSAGAWA JIRI　SITE

―― P・Q地点の調査 ――

1992・3

長野県飯山市教育委員会

H25号住居址出土器

H22・29号住居址出土器

H32号住居址出土器

序

飯山市教育委員会教育長　岩崎　彌

飯山市は長野県の北部に位置し、山紫水明で優れた自然環境に恵まれています。また、古く輝かしい歴史をもち、その歴史の背景のなかで育まれてきた数多くの文化財も残されています。これら美しい自然も価値の高い文化財も、ひとしく私達飯山市民の祖先が残してくれた貴重な遺産であります。これら貴重な遺産を知ることは、ふるさとを知ることであり、ふるさと飯山のたぐいなき良さを知ることでもあります。また、そうした先人の歴史を学ぶことは、過去をみつめなおし未来を考えるための礎になるものです。

一方で、祖先が残してくれた貴重な文化財が破壊され、失われることは誠に残念なことであります。これらを大切に保存して後世に伝えることは、現代に生きる私達の責務でもあります。

田草川尻遺跡は古くからその存在が知られており、学会においても注目されている遺跡であります。このたび遺跡地内に建物建設が計画されることになり、市教育委員会では記録保存のための緊急発掘調査を実施しました。調査団長の高橋桂先生をはじめ、調査員各位、作業員の方々など多くの市民の皆さんの御協力を得まして実施し、初期の目的を達成することができました。

本報告書が広く市民の皆様方に読まれ、私達祖先の生活を偲ぶとともに、地域の将来を考える資料しとて活用されることを念願いたします。

平成4年3月

例言

1　本書は、長野県飯山市大字蓮字北原197番地（Ｐ地点）及び大字静間字四本木2191-1番地（Ｑ地点）に在する田草川尻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は以下の原因により行った。

　Ｐ地点　倉庫・店舗建設　㈱ヤブハラ

　Ｑ地点　事務所建設　大塚清次氏

3　調査は、ヤブハラ、大塚氏それぞれの依頼により、Ｐ地点は平成３年５月15日より７月10日まで、Ｑ地点は７月３日より同11日まで発掘調査を行い、整理作業は平成４年２月に行った。

　また、発掘に伴う経費もそれぞれより負担いただいた。

4　調査にかかる組織・参加者名簿は以下のとおりである。

飯山市遺跡調査会（平成３年度）

顧問	小山　邦武	市長
会長	佐藤　春夫	市教育委員会委員長
副会長	長谷川元一	市社会教育委員会長
委員	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長
	丸山　豊雄	市議会総務文教委員長
	中村　敏	市公民館長
	高橋　桂	日本考古学協会会員
	山崎美都枝	市教育委員会委員長職務代理（平成３年10月９日退任）
	福沢　裕文	市教育委員会委員長職務代理（平成３年10月10日就任）
	岩崎　彌	市教育委員会教育長
事務局長	佐藤　清	市教育委員会教育次長
事務局次長	渡辺　博	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月　静雄	市教育委員会社会教育係主事
	樋山二二子	市教育委員会臨時職員

調　査　団

団　長	高橋　桂	飯山北高等学校教諭
調査担当者	望月　静雄	
調査主任	小林　新治	
調査員	常盤井智行	
〃	桃井伊都子	
〃	田村　滉城	

発掘作業参加者（順不同・敬称略）

大森信衛　竹内大五郎　北條辰男　石沢悦次　増山春夫　小林経雄　樋山　巌　吉田忠彦　高橋秀明　丸山みどり　三浦千佳子　八井沢房江　中島五昭　中島トシエ　土屋久栄　小沢岐樹　丸山三二　常田利夫　村松修司　達家わかの　市村ますみ　高橋コシノ　羽田たつ子　稲場　宏

整理作業参加者

小林みさを　北山けさえ

5　田草川尻遺跡は、過去７次に亘る緊急発掘調査がなされており、それぞれ報告書が刊行されてきたので、それを踏襲して『田草川尻遺跡Ⅷ』として報告するものである。

6　本書に収録した遺跡の概要は以下のとおりである。

　Ｐ地点　　古墳時代竪穴住居址７軒　平安時代竪穴住居址１軒ほか

　Ｑ地点　　古墳時代竪穴住居址２軒

7　本文中における住居址番号は、第２次調査（昭和52年）以来、弥生時代をＹ１号住居址，古墳時代から平安時代までの住居址をＨ１号住居址として以降続き番号で付番してきている。したがって、今回発見された古墳・平安時代竪穴住居址はＨ22号からネーミングしている。

8　発掘調査は、主として主任の小林新治が中心となって行った。整理・報告書作成・作図作業は、小林が中心となってまとめた。なお、遺物の作図については桃井伊都子、遺物の写真撮影は田村況城が担当した。

9　本書の執筆は、遺構を小林、遺物については常盤井智行があたり、目次に分担を明記した。なお、遺構については望月が一部加除筆しているため文責は望月にある。また、全体は団長高橋桂が統括した。

10　本書の編集は、飯山市教育委員会事務局が行った。

11　発掘作業において下記の方々からご指導・ご協力を賜った。記して御礼申し上げます。

（順不同・敬称略）

笹沢浩・松澤伸一・飯山市森林組合・大島重機

目　次

序 …… 1
例言 …… 2
目次 …… 4
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……望月静雄…… 6
　A　田草川尻遺跡の位置 …… 6
　B　歴史的環境 …… 7
第２章　田草川尻遺跡概観 …… 12
　A　過去の発掘調査 …… 12
　B　P・Q地点の調査 …… 15
　　1　調査に至る経過 …… 15
　　P地点 …… 15
　　Q地点 …… 15
　　2　調査経過 ……小林新治…… 15
　　P地点 …… 15
　　Q地点 …… 15
第３章　発見された遺構と遺物 …… 18
　A　P地点 …… 18
　　1　古墳時代の遺構と遺物 …… 18
　　遺構 …… 18
　　遺物 ……常盤井智行…… 27
　　2　平安時代の遺構と遺物 …… 32
　　遺構 ……小林新治…… 32
　　遺物 ……常盤井智行…… 32
　B　Q地点 …… 33
　　1　古墳時代の遺構と遺物 …… 33
　　遺構 ……小林新治…… 33
　　遺物 ……常盤井智行…… 37
第４章　まとめ ……高橋　桂…… 39

挿図目次

図１　田草川尻遺跡の位置（1:10,000）
図２　周辺遺跡分布図（1:25,000）
図３　深沢遺跡出土遺物
図４　山の神遺跡出土遺物
図５　勘助山古墳
図６　田草川尻遺跡編年図集成
図７　田草川尻遺跡と調査地点（P・Q地点）
図８　P地点全体図（1:300 ）
図９　H22・29号住居址（1:60）
図10　H23号住居(1:60)
図11　H25号住居址(1:60)
図12　H26・27号住居址(1:60)
図13　H28号住居址(1:60)
図14　土坑遺物分布図(1:30)
図15　柱穴群分布図１(1:150)
図16　柱穴群分布図２(1:150)

図17　P地点出土古墳時代の土器１（１：４）
図18　P地点出土古墳時代の土器２（１：４）
図19　P地点出土石製紡錘車（１：２）
図20　H24号住居址(1:60)
図21　P地点出土平安時代の土器（１：４）
図22　Q地点調査区及びD・E地点(1972)　祭祀遺構位置(1:500)
図23　Q地点遺構全体図(1:150)
図24　H31号住居址(1:60)
図25　H32号住居址(1:60)
図26　Q地点出土土製玉（１：２）
図27　Q地点出土古墳時代の土器（１：４）

ＰＬＥＡＴ目次

ＰＬ１　写真１　田草川尻遺跡航空写真
ＰＬ２　写真２　Ｐ地点近景
　　写真３　調査区伐採後の状況
ＰＬ３　写真４　重機による表土除去作業
　　写真５　遺構確認作業
ＰＬ４　写真６　調査風景
　　写真７　市議会総務文教委員による視察
ＰＬ５　写真８　平板測量調査風景
　　写真９　レベル読み取り作業風景
　　写真10　遺物レベル作業風景
ＰＬ６　写真11　調査区全景
　　写真12　H22･33号住居址（西より）
ＰＬ７　写真13　H22･33号住居址完掘状況
　　写真14　H33号住居址カマド
　　写真15　H22号住居址カマド
ＰＬ８　写真16　H23号住居址確認状況（北より）
　　写真17　H23号住居址（北より）
ＰＬ９　写真18　H24号住居址確認状況（上の黒い部分はH23号住居址　南東より）
　　写真19　H24号住居址カマド
ＰＬ10　写真20　H25号住居址遺物出土状況
　　写真21　H25号住居址（東より）
ＰＬ10　写真22　H26･27号住居址（南より）
　　写真23　H26･27号住居址遺物出土状況（南より）
　　写真24　H26号住居址紡錘車出土状況
ＰＬ12　写真25　H28号住居址（南から）
　　写真26　H28号住居址（西から）
ＰＬ13　写真27　Ｐ地点出土遺物１
ＰＬ14　写真28　Ｐ地点出土遺物２
ＰＬ15　写真29　Ｑ地点　H31号住居址（東から）
　　写真30　H32号住居址（西から）
ＰＬ16　写真31　H32号住居址　遺物出土状況
　　写真32　H32号住居址遺物出土状況
　　写真33　H32号住居址遺物出土状況
ＰＬ17　写真34　Ｑ地点出土遺物１

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

A　田草川尻遺跡の位置

田草川尻遺跡は、長野県飯山市大字静間字四本木から大字蓮字北原にかけて、縄文時代から中世に亘って断続的に集落が営まれた大複合遺跡である（図１）。

甲信国境に源を発する千曲川は、佐久・上田盆地を流下し、長野市川中島付近で犀川を合せ肥沃な善光寺平を形成する。善光寺平東縁に至ると、東側の長丘丘陵、西側の斑尾山麓の隆起地帯を穿入蛇行する。そして、中野市古牧地区の長丘丘陵北端に至ると再び流域を広げ信濃に最後の平を形成する。これが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると信越国境の山岳地帯を再度穿入蛇行し越後へと流れ去り、信濃川と名を改める。

田草川尻遺跡は、飯山盆地が展開する最初の地点に位置する。東側に高社山が聳えているために比較的狭長な沖積地を千曲川が流れ、善光寺平と飯山盆地との回廊口的な地点となっている。

飯山盆地西縁は上境～鬼坂断層線によって画されているために急傾斜をもって斜面に接している。そのため山地から流出する河川は急流をなし、斜面の急な小扇状地を形成している。遺跡の位置する秋津地区でも三つの扇状地が発達している。すなわち、北から清川・田草川・宮沢川による各扇状地である。

田草川尻遺跡は、このうち田草川扇状地扇端部に立地する。南側は宮沢川の扇状地と千曲川の沖積地に接しており、北側は清川扇状地との間の低湿地帯に接している。また、東側は千曲川が扇状地扇端部を抉るように（攻撃斜面）流れており、その比高差は５mである。近年では千曲川の増水のたびに冠水しているが、これは広い低地をもつ対岸の中野市岩井地区で築堤されたためで、それ以前は冠水することはなかったという。

今回の調査箇所は、二つの事業者が田草川の南・北側にそれぞれ建物を計画したものである。これを従前からの地点名を踏襲して、Ｐ・Ｑ地点と呼称することとした。Ｐ地点は田草川の南に接し、国道沿いの緩斜面に所在し、昭和47年調査のＣ地点に接している。Ｑ地点は田草川の北側で、かつて実施して古墳時代の祭祀遺構が発見されたＥ地点に接している。

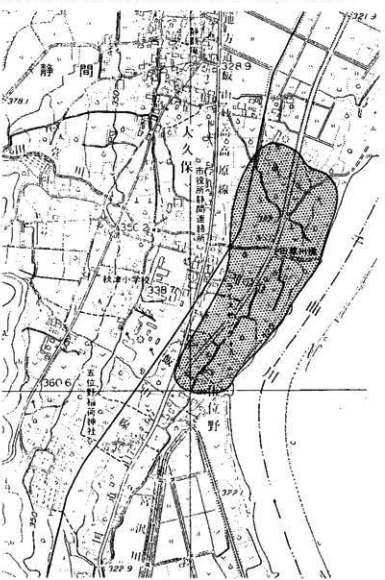


図１　田草川尻遺跡の位置（１：10,000）

B　歴史的環境

本稿では、田草川尻遺跡周辺の考古学的環境について概観することとする。

田草川尻遺跡は、飯山盆地の南玄関口に所在し、千曲川対岸は中野市岩井・田上地区に接する。この地区にも弥生時代を中心とした遺跡が存在するが、いずれも大規模な調査は実施されておらず、その内容にまで言及されていない。また、北側は飯山市街地の低湿地帯に接し、遺跡の存在は明らかでない。

遺跡の所在する秋津地区は、大字静間・蓮両地区をあわせた区域で、静間の一部は現在飯山地区に包括されるが、宮沢川・田草川・清川の三河川により発達した扇状地上に位置する。これらの地理的環境は早くから居住するのに適した環境を具備していたと思われ、多くの遺跡が知られている（図２）。

(1)　**旧石器時代**　秋津地区に明確な当該期の遺跡は知られていない。ただし、１点松澤芳宏氏が採集した遺物に丸のみ形石斧ないし刃部磨製石斧があり、今後当地区で明らかになる可能性がある。近辺では飯山市木島地区の安田神社遺跡(1) で黒曜石製のマイクロコアーが発見されている。

(2)　**縄文時代**　草創期あるいは早期までは前記三扇状地上はいまだ安定していなかったと思われ、表裏施文の回転縄文系土器群や押型文土器の発見される遺跡は、いずれも山地に所在している。十三が丘(5)や田草オヤチ(13)は、平坦地より150m以上の高所に存在している。これが前期から中期になると十三が丘遺跡でも発見されているものの、荒船(19)や茂衛門新田(27)など扇状地の扇頂部へ、さらに京の町(9)、田草川尻遺跡などの扇端部にも立地するようになる。とくに深沢遺跡(28)は、中期前葉の大集落址と考えられている。40数個体の土偶や、北陸地方の影響を受けた土器様式は、北信地方の中期文化を研究する重要な遺跡のひとつと考えられている（図３）。晩期には山ノ神遺跡(14)がある。昭和47年、圃場整備事業に伴う緊急発掘調査により配石遺構が検出され、佐野式Ⅰ・Ⅱ式土器が検出されている（図４）。特に魚形線刻画土器片の発見は、生業問題と共に縄文絵画としても注目を浴びた（高橋1972）。

(3)　**弥生～古墳時代**　田草川尻遺跡を中心として田草川・清川両扇状地末端面に展開される。中町郷屋遺跡(8) は古墳時代を中心とするが、昭和40年代中半の圃場整備事業によっておびただしい量の遺物が発見されたことは、今も記憶に新しい。当時の観察では、破壊された部分もあるが残された箇所も多いと思われるので、今後の開発に当たっては重要遺跡として保護策を講じなければならないだろう。一方、古墳は扇状地を見下ろせる山地に造営されている。発掘調査された古墳はないが、勘介山古墳(18)は前方後方墳として古式古墳と推定されている（図５）。また、法花寺古墳群(12)や五里久保古墳群(21)は群集墳として注目される。これらの古墳に比較して集落址が前記二か所のみでは少ない感じも受け、今後大規模な古墳時代の集落址が発見される可能性も残されている。

(4)　**奈良・平安時代**　古墳時代後期には田草川尻遺跡のみとなり、遺跡の絶対数も減少する。奈良時代に至っては皆無となっている。このことは飯山地方全体に当てはまることであり、大きな究明課題となっている。平安時代になり、９世紀後半になると中町郷屋・田草川尻遺跡などで再び集落が形成されるようになり、やがて中世社会へと移行する。

田草川尻遺跡を中心として概観した。秋津地区の原始・古代は、縄文時代の中半以降扇状地上を居住区として活動するようになり、弥生から古墳時代にかけて開拓されたと考えられる。その後奈良時代の痕跡は認められないが、平安時代に入って再び集落が形成されると共に開拓され、そうした背景の下に志津間小次郎など文献上登場する豪族が成長していったものと思われる。

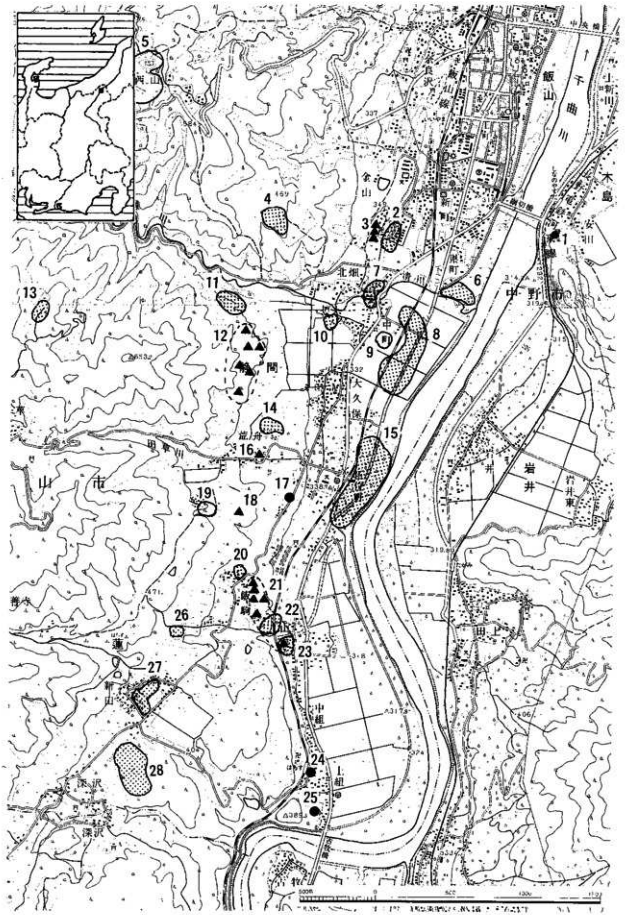


図２　周辺遺跡分布図（１：25,000）

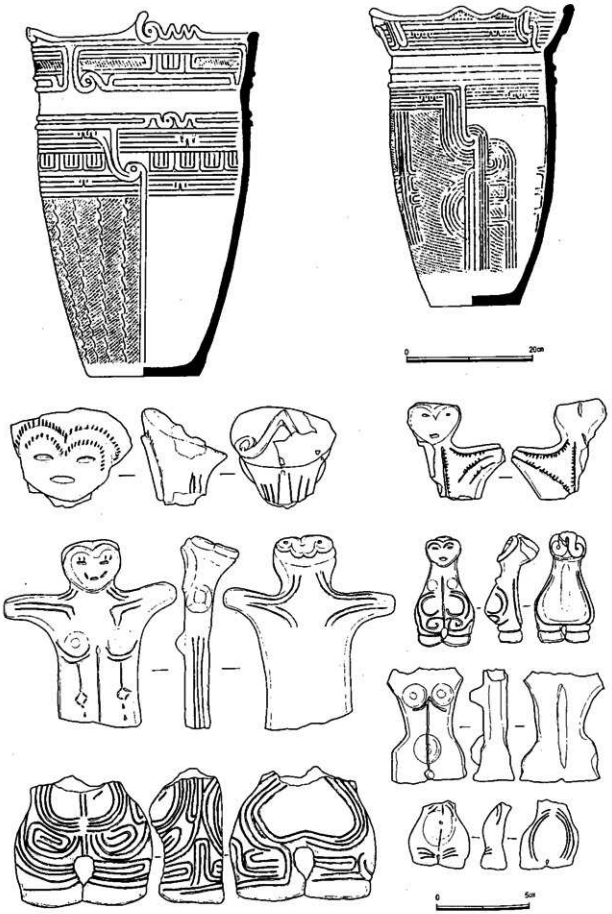


図3　深沢遺跡出土遺物（西沢　1982）

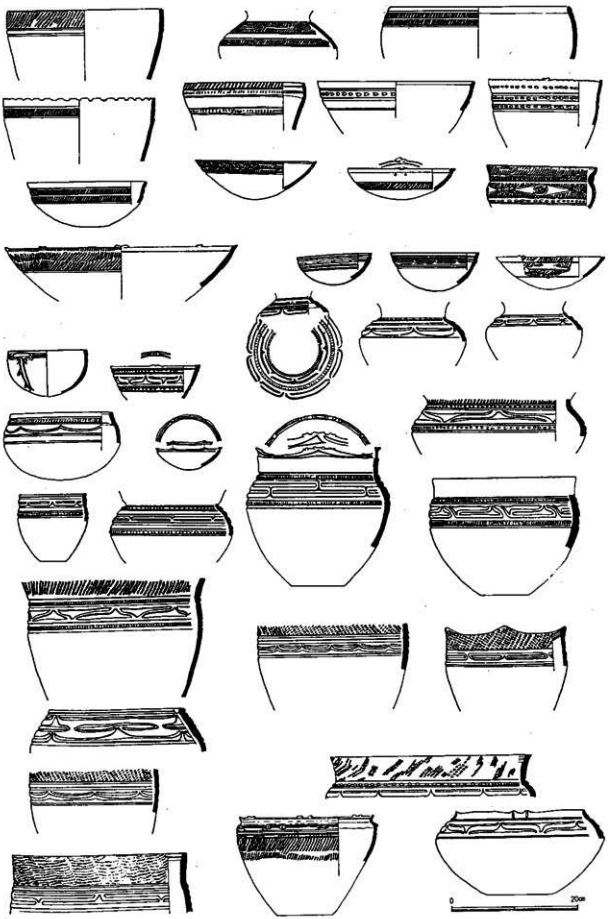


図4　山の神遺跡出土遺物（大原　1982）

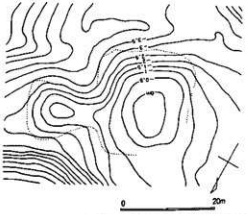


図5　勘介山古墳（県史より）

No.	遺跡名	遺跡の性格・内容	文献・備考
1	安田神社	旧石器（細石核）単独採集	信濃史料第一巻上　1954
2	法伝寺	平安時代土器散布地	
3	法伝寺古墳群	1号墳円墳　2号墳帆立貝式古墳鉄剣土	松澤芳宏　1976
4	北畑北	縄文中期・古墳時代遺物散布地	
5	十三が丘	縄文時代集落址、弥生・平安時代遺物散布地（表裏縄文土器・有尾式土器等）	
6	小屋解	平安時代集落　住居址3軒発掘	飯山市教委　1984
7	北畑	弥生石器出土、平安時代遺物散布地	
8	中町郷屋	古墳・平安時代集落址　圃場整備中採集	
9	京ノ町	縄文中期集落址　土器・石器多量	
10	静間神社南	弥生・平安・中世遺物散布地	
11	平山	弥生中期土器散布地	
12	法花寺古墳群	1～6号墳　円墳	
13	田草オヤチ	縄文早期～前期土器散布地、平安時代遺物散布地　（押型文土器）	
14	山の神A・B	縄文後期配石遺構　魚形線刻画土器片	大原正義　1982　ほか
15	田草川尻遺跡	本報告書参照	
16	船山古墳	円墳	
17	五位野	縄文中期、弥生中・後期遺物散布地	
18	勘介山古墳	前方後方墳	松澤芳宏　1983
19	荒船	縄文前期～中期遺物出土	
20	道源沢	縄文時代遺物散布地	
21	五里久保古墳	1～8号墳　円墳・方墳	
22	五里久保	縄文早期～後期遺物散布地	
23	山根	縄文時代前期～後期遺物散布地	
24	上組	弥生太型蛤刃石斧採集	
25	蓮	不詳	
26	駒立	平安時代遺物散布地	
27	茂衛門新田	縄文前期遺物散布地	
28	深沢	縄文中期集落址　土偶約40点　土器多量	西沢隆治　1982　ほか

表1　周辺遺跡

引用・参考文献
高橋　桂　1972　「魚形線刻画のある土器片」『信濃』24-11
飯山市教育委員会　1973　『飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書』
松澤　芳宏　1976　「帆立貝式古墳の一例」『高井』36号
飯山市教育委員会　1978　『長野県飯山市田草川尻遺跡』
太田　文雄　1980　「北信濃弥生後期編年について」『信濃第32巻4号』
松澤　芳宏　1982　「有尾古墳群・勘助山古墳」『長野県史』資料編1巻
松澤　芳宏　1983　「飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35巻3号
飯山市教育委員会　1984　『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅲ』飯山市埋蔵文化財調査報告第9集
飯山市教育委員会　1986　『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅳ』飯山市埋蔵文化財調査報告第13集
飯山市教育委員会　1988　『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅴ』飯山市埋蔵文化財調査報告第17集
飯山市教育委員会　1991　『田草川尻遺跡Ⅵ』飯山市埋蔵文化財調査報告第27集
飯山市教育委員会　1992　『田草川尻遺跡Ⅶ』飯山市埋蔵文化財調査報告第28集

第２章　田草川尻遺跡概観

A　過去の発掘調査

田草川尻遺跡は、信濃史料第一巻（上）の地名表では、伍位野として次のように記載されている。

（縄）加曽利Ｅ式　（弥）栗林式、箱清水式、有孔石剣（残片）　（須）破片

その後、第１次の調査から平成２年の７次の調査までによって、図２に示したとおり縄文時代から平安時代までの大複合遺跡であることが判明した。具体的には、縄文時代においては、前期花積下層式併行・関山式併行・黒浜式併行、中期初頭土器、後期堀の内式併行の土器。石器では、打製石斧・磨製石斧・石鏃・くぼみ石・石匙などである。

弥生時代では、中期～後期（栗林式・箱清水式）土器が良好な状態で出土し、特に後期の土器は、太田文雄によって田草川尻Ⅰ・Ⅱ式に分類されている（太田　1982）。

古墳時代では、関東泉式～鬼高式併行の土器、祭祀遺物。

平安時代では、９世紀後半から10世紀の土器が出土している。

なお、遺構では弥生後期住居址３軒、古墳時代竪穴住居址６軒・同祭祀遺構２基、平安時代竪穴住居址13軒が発見されている。

第１次から７次までの調査原因・面積等は以下のとおりである。

次	調査年	調査区	調査面積	調査原因	特記事項
1	昭和47年	A～E	600㎡	国道117号線バイパス敷設工事	古・平住居、古祭祀
2	昭和52年	F	1,500	工場用地造成	弥～平住居
3	昭和57年	G	78	店舗建設	古土器
4	昭和60年	H・I	164	国道117号線改良工事	古・平土器
5	昭和62年	J	110	店舗建設	平掘立
6	平成元年	K	180	店舗建設	平住居、中井戸
7	平成２年	L～O	2,000	工場・倉庫・店舗建設	古・平住居

表２　田草川尻遺跡発掘調査一覧

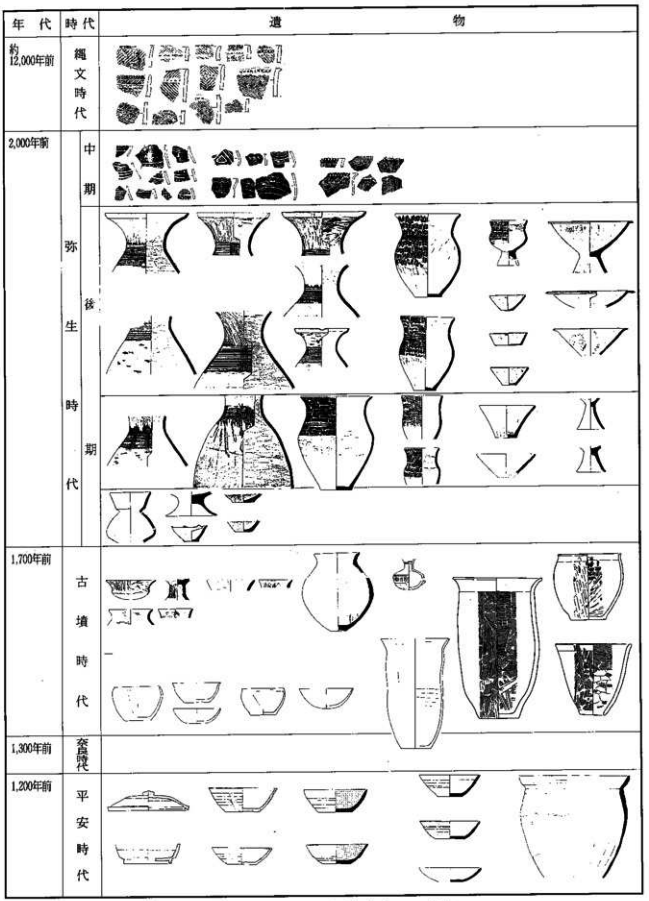


図6　田草川尻遺跡　編年図集成（Ⅰ～Ⅳより）

図７　田草川尻遺跡と調査地点（Ｐ・Ｑ地点）　１：2,500

B　P・Q地点の調査

1　調査に至る経過

(1)　P地点

平成2年10月1日付けで、㈱ヤブハラ代表取締役社長藪原太志氏より、文化財保護法第57条による届け出があった。藪原氏によれば、借用した土地に店舗・住宅・倉庫を兼ねた建物を建てたいとのことであった。対象地は、従前より特に縄文土器の採集できる場所としてとらえられていた重要な場所であった。また、現国道より高位にあるため削土するとのことを伝えられた。店舗等の営利目的の場合は原因者に費用を含めて協力をいただいているので、そのことを伝えると共にできるだけ削土せずに土盛を考慮してもらうよう依頼した。その後何度か交渉を重ねたが、設計上どうしても削土する部分が多いので発掘調査を実施するよう依頼された。12月20日、県教育委員会教育長名で記録保存として発掘調査を実施するよう藪原氏に回答があった。

平成3年5月7日付けで藪原氏と発掘調査の委託契約を締結した。なお、調査から報告書に至る費用負担については全額藪原氏の負担による。

(2)　Q地点

平成3年4月3日付けで、市内木島の大塚清次氏より57条の発掘届けが提出された。店舗・事務所を計画され、やはり現道より高位にあることから削土を予定されているとのことであった。これについて、4月22日、県教育委員会教育長より記録保存として発掘調査を実施するよう回答があった。5月21日付けで大塚氏と発掘調査委託契約書を締結した。費用は全額大塚氏の負担による。

P・Q両地点は、約80mの至近距離であることから、継続して実施した方が能率的・経済的であると判断し、他での調査も予定していたが、6月から7月中旬までの予定で発掘調査を実施することとなった。

2　調査経過

P・Q地点の発掘調査は、事業は別個のものであり、地区も田草川の南と北に別れていたため、7月上旬は2班に別れて調査をした。調査日誌は地点別に報告する。

(1)　P地点

国道117号線と田草川に接していて、店舗・倉庫の基礎工事に伴う調査であった。対象面積は約1,000㎡であったが、地下に影響を及ぼさない西端部を除き約770㎡を発掘調査をすることとした。

発掘はグリット法（5m）とし、官民界杭1本と国道BM＝322.327 を原点として設定した。C－3グリット東北杭とC－9グリット北西杭が基点である。

(2)　Q地点

国道117号線沿いで、第1次発掘調査（昭和47年）のE地点と豚舎との間になる地点で、約110㎡を発掘調査をすることとした。発掘は5mグリットを設定した。

各地点の調査概要は以下のとおりである。

P地点

所　在　地　飯山市大字蓮字北原197 番地

土地所有者　猪瀬　功氏

調査委託者　㈱ヤブハラ（代表取締役　藪原太志氏）

調 査 期 間　平成3年5月15日～7月10日

調 査 面 積　770㎡

Q地点
所　在　地　飯山市大字静間字四本木2191-1ほか
土地所有者　佐藤政雄氏
調査委託者　大塚清次氏
調査期間　平成3年7月3日～7月11日
調査面積　110㎡

(3) 日誌抄

(a) P地点

月　日	概　　要
5．15	立木伐採処理終了。
．16	器材運搬、テント2張設置。
．17	テント1張設置、テント内外の草刈。
	器材テント内へ搬入。
	基準杭打。
．18	表土除去（重機による）。
．20	表土除去（重機による）。
	調査開始式　基準杭打　グリット杭打（間隔5m）
	表示板設置　南端からＡＢＣ……
	東端から１２３……
	西端部から調査開始、A・Bの11～12グリットの黒色土層から縄文土器片を検出。
．21	B－12グリットで縄文土器片の集中箇所を検出。木・笹の根が多く作業手間どる。
．23	石鏃1点（B－12土器集中地点）、打製石斧1点（ＳＸ０１上面）出土。
．27	縄文土器片集中地点（B－12）の遺物取り上げ完了。
	遺構掘り作業。
．29	A・B－9のグリット内の黒色土層で縄文・古墳時代の土器片検出。
．31	D－7内で長胴甕の一部検出
6．5	C－8を中心とした古墳時代住居址（H22住）を検出。
	ヤジリ1点と土器片（H22住）、磨製石斧1箇（D－6）検出。
．6	石槍1点、H22住内で検出。
．7	H22住内に一段深く掘りこんだ住居址様の遺構あり。
．10	B・C・D－5～6内で住居址（H23住）を確認。
	A・B－5～6　内で住居址（H24住）を確認。
	B－9で土器片密集の土坑（ＳK04・05）を確認。
．11	A－7のピット1から石鏃1点検出。
	A－9の土器片密集の土坑（ＳK06・07）を確認。遺物実測完了。
．12	H－23住の南端（B－5）で、土坑（ＳK09）確認。内部に焼土あり。
．13	H24住のカマド内から土師器坏が出土。平安時代と思われる。
	また、H24住がH23住を切っている。
．14	市議会総務文教委員会視察

月　日	概　　要
．17	D・E－6～7で住居址（H25住）とカマド跡確認。北側半分は攪乱されている。 H24住の東側が半分程攪乱されている。
．18	D－4内の浅い土層から縄文土器片検出。
．19	C・D・E－3～4で住居址（H26住）確認。古墳時代。
．21	D－2の西端で貼床、焼土確認。
．26	H26住内で石製紡錘車1点検出。 そのほか土器片多量（古墳時代） H25住で土器片集中して出土。 H26住の東端を、別の住居址（とりあえずH27住とした）が切っているように見える。
．28	H26住内で方形に一段深く掘りこんだ遺構あり。
7．1	E－3～2で住居址（H28住）を確認。
．2	E－3で土坑（SK10）を確認。 H26住内のピットから坩1個体検出。
．4	H28住内で貼床確認。
．8	仮に付番したH27住の輪郭が確認できなかった。
．10	器材撤収し、P地点の全ての調査を終了した。

(b)　Q地点

月　日	概　　要
7．3	表土除去（重機による）
．4	表土除去・トレンチを入れる。（重機による） 午後3時半から調査開始。
．5	北端で住居址（H31住）の確認に続いて、南端でも住居址（H32住）遺構確認。、東側が攪乱されていた。
．8	H31住の西端カマド跡確認。
．9	H31住内で土器片多量出土。中に弥生中期の土器片も少量検出。 H32住で土器片多量出土。この他ツボ、鉢、装飾品と思われる球形の土製品（直径約1.6cm）1点出土する。 土器のあった箇所に礫も集まっていた。
．11	H32住内ピットより土器1個体検出。 平板作図、器材撤収し、Q地点の全ての調査を終了した。

第３章　発見された遺構と遺物

Ａ　Ｐ地点

調査区全体が扇状地の二次堆積土に覆われており、遺構の確認が困難な地点ではあったが、古墳時代の住居址７軒と平安時代の住居址１軒の検出をはじめ、柱穴群３、土坑等を検出した（図８）。以下に説明を加える。

１　古墳時代の遺構と遺物

(1)　遺構

竪穴住居址

Ｈ22号・Ｈ29号住居址（図９）

Ｃ・Ｄ－７・８区において検出された。7.1m×6.3mの隅丸でほぼ方形の22号住居址が、一辺4.7mの隅丸方形プランを呈する29号住居址に切られている。

22号住居址は、西側の一辺のみ破壊を免れており、ほぼ中央にはカマドが存在している。29号住居址は、22号住居址の壁を利用しており、北・東壁が22号住居址と重複する。また、西・南壁下には周溝がめぐる。柱穴は、22・29号住居址が重なり合っているため明確ではないが、P_5・P_8は深くてしっかりしているため、位置から29号住居址の主柱穴と考えてさしつかえないだろう。なお、P_1・P_2は22号住居址に所属するものと思われる。他の柱穴については断定できない。

覆土は、暗褐色土を基調としているが、Ｈ22号住居址では明褐色土でプランが明確でなかった。また、覆土内には頭大の礫が入り込んでいたが、土層からは流れ込みの可能性は少ない。なお、基盤層には大石が入り込んでいる。

住居址南東コーナーに掘り込まれているＳＫ１は、Ｈ29号住居址に埋められており22号住居址の施設もしくは29号住居址構築以前の単独土坑と思われる。坑内よりの出土遺物はない。

遺物は、22号住居址カマドを中心として、長胴甕などが出土している。

Ｈ23号住居址（図10）

Ｂ・Ｃ・Ｄ－５・６区に位置する。一辺が８ｍの方形を呈する大型住居址である。確認面からの深さは25～５㎝で、斜面下の東側で浅くなっている。周溝は西側壁下のみめぐっている。また、南壁のほぼ中央はＨ24号住居址に切られている。炉は北壁よりの中央に所在する。地床炉である。

なお、ＳＫ０９は住居址確認時において検出されているので23号住居址より新しい。

Ｈ25号住居址（図11）

Ｄ・Ｅ－６・７区において検出された。田草川に向かって傾斜する部分で、かつての護岸工事や溝によって破壊されており、全体の約⅓が検出されたにとどまった。およそ一辺が4.70mの方形プランを呈するものと思われる。周溝は西及び南壁下にめぐるが、北側は不明で、さらに東側は確認できなかった。カマドは西壁のコーナーよりにある。編み物石状の川原石がカマド内より出土しているが、おそらく構築材の一部として用いられたものであろう。床面は前記工事に伴って破壊されている。東側の一部に貼り床が一部残っており、床面に密着して遺物が集中して出土した。柱穴は明確でないが、P_3は主柱穴、P_3は住居址内土坑、P_8は攪乱坑かもしれない。なお、P_3上面からは炭化材（柱）が検出されている。

遺物は、球胴甕・鉢・高坏が出土している。

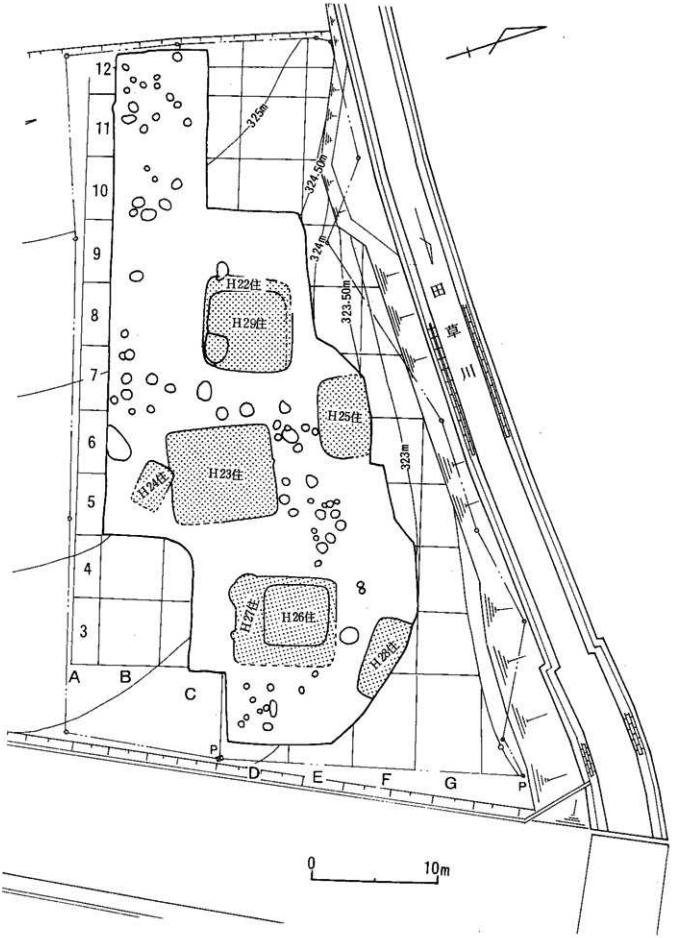
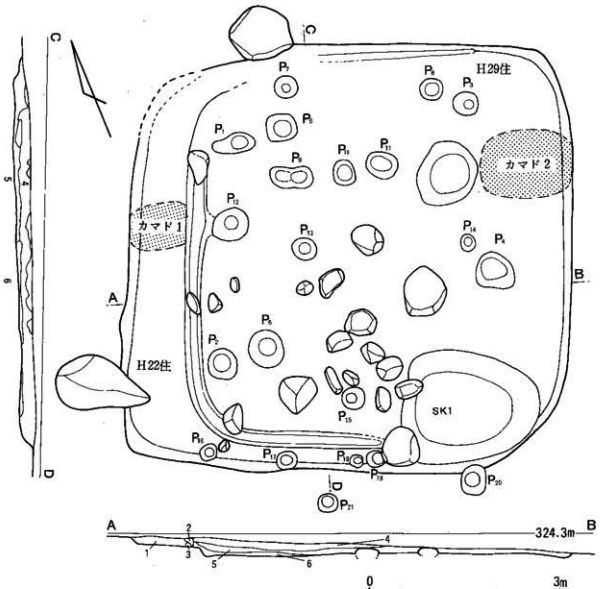


図8　P地点全体図（1：300）



土層説明
1　明褐色土層
2　黒色土層
3　ロームブロック
4　暗褐色土層1
5　暗褐色土層2（礫含）
6　黄褐色土層

図9　H22・29号住居址（1：60）

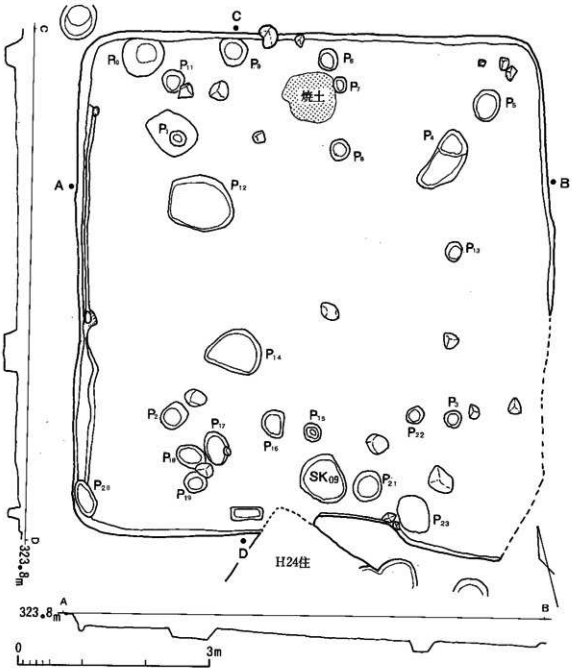
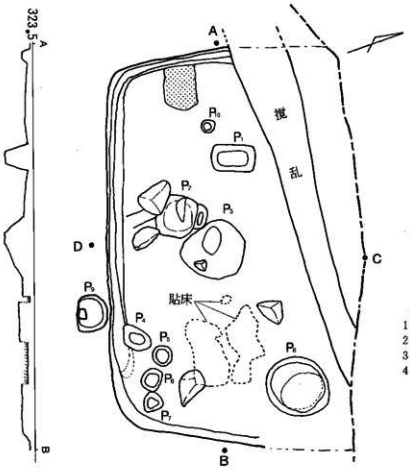
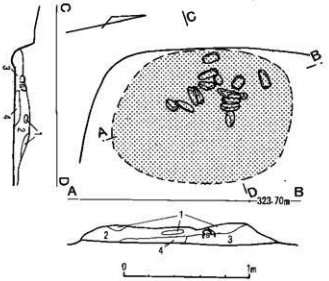


図10　H23号住居址（1：60）



<土層説明>
1 暗褐色土層
2 茶褐色土層
3 明褐色土層
4 黒褐色土層



<土層説明>
1 焼土
2 黒色土層
3 明褐色土層
4 灰白色粘土質層

図11　H25号住居址・カマド（1：60，1：40）

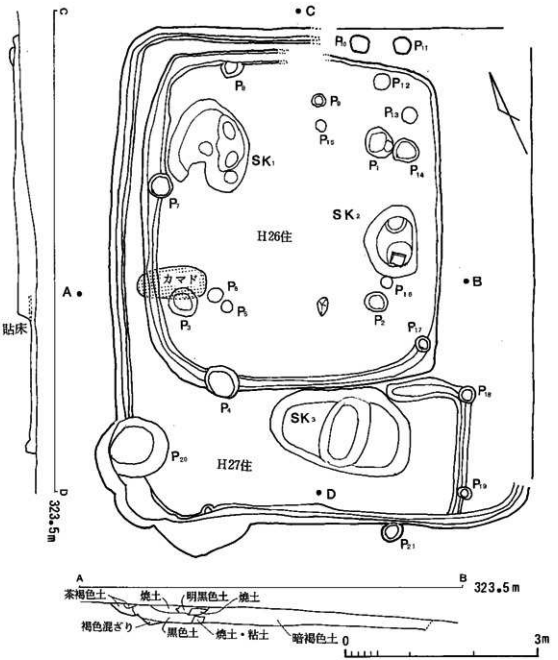


図12　H26・27号住居址（1：60）

H26・27号住居址（図12）

2軒が重複しており、その状況はH22・29号住居址に似る。H26号住居址は、27号住居址の床面を掘り込んで構築されており、その規模は4.0×3.5mの隅丸長方形プランを呈する周溝は東側のみなく、他は壁下をめぐる。カマドは、東壁のやや南コーナー寄りにある。なお、住居址内にあるＳＫ１・２は不定形な形態であるが、深さ60cm以上ある。遺物は、椀、坏・鉢・高坏・甑などが出土している。27号住居址は、5.90×4.90mの規模を有する。東側は斜面下となるため壁は破壊されていた。周溝は、確認し得た部分では全周を巡っている。床面は貼り床されている。ＳＫ３はこの住居址に伴うものであるかどうか明確でない。なお、カマドについても明らかにならなかった。

H28号住居址（図13）

E・F－3・4区に位置する。調査区外に延びるため約½の調査にとどまっている。短辺が4.60mと推定される。検出された部分のほぼ中央には、固く締まった貼り床が検出されている。その東寄りには焼土があり、壁に接続していないために、カマドではなく地床炉であった可能性が高い。

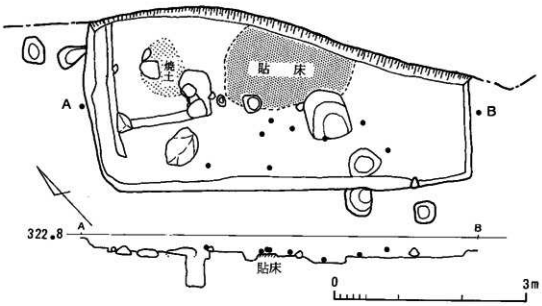


図13　H28号住居址（1：60）

B　土坑

時期は明確でないが、ここでは古墳時代の遺構として触れる。

イ、SK04（図14）

SK04は、調査区の西端部に近いB－9グリットに位置する。直径145cmの半円形の土坑で、壁面は直立し、深さは柱穴部を除き、平均10cmと浅い。上層には、土師器片45点が集中して出土。石4点は田草川氾らん時の流入石と思われる。

ロ、SK05（図14）

SK05は、SK04の西に隣接し、南北に130cm、東西は、103cmの楕円形の土坑で、深さは平均15cmと浅い。上層に土師器片49点が集中して出土。石2点は田草川氾らん時の流入石と思われる。

C　柱穴群

イ、第Ⅰ柱穴群（図15）

A・B－8～9とC－9グリット内に、集中して柱穴、土坑が検出され、そのうち柱穴は26と多かったが、掘立柱建物址となるような並びをもつものはなかった。

また、A・B－9内では土師器の椀の一部や土器片がまとまって出土したが、遺構として捉えることはできなかった。

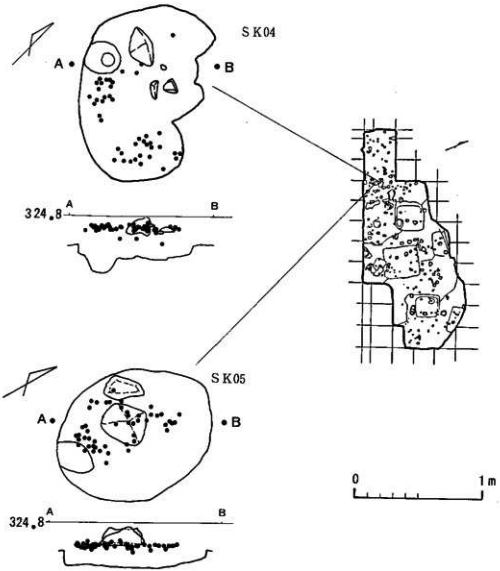


図14　土坑遺物分布図（1：30）

ロ、第II柱穴群（図15）

C－6～7、D－4～7、E－5グリット内で出土した46本をまとめたものである。その一部がH23号住内及んでいるものと推定されるが、これも掘立柱建物址となる並びがなく、特にD・E－4～5内で、一部列をなしているが、これも同様である。

ハ、第III柱穴群（図16）

C・D－2～3グリット内で21を検出したが、掘立柱建物址となるような並びをもつものはなかった。また、焼土と貼床の一部と推定される部分も検出されているが、住居址と断定し得なかった。

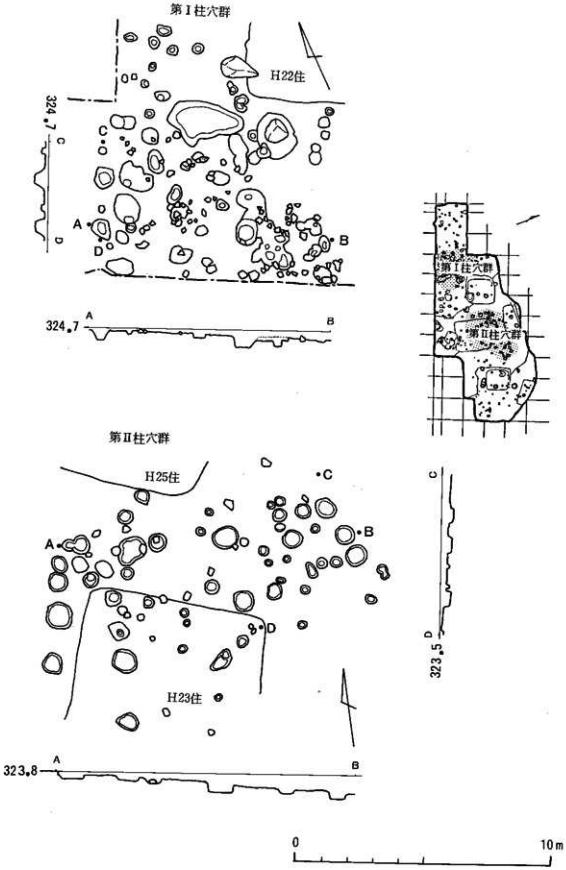


図15　柱穴群分布図１（１：150）

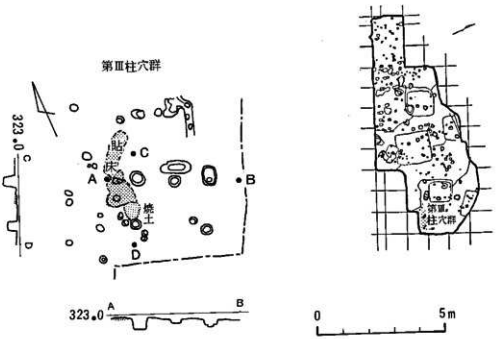


図16　柱穴群分布図２（１：150）

(2)　遺物

古墳時代の遺物は一部の土器と石製品のみ報告する。土器については報告するのは住居跡出土品で、完形に近く復元できたもののみであり、住居跡出土品の器種構成を必ずしも示していない。この土器については改めて詳細を報告したい。

H22・29号住居址出土土器（図17－１～５）

１・２は長胴の甕である。１は口径16.1㎝、器高30.7㎝、胴最大径は胴下半にあり16.0㎝。２は口径16.7㎝、器高31.9㎝、胴最大径は胴下半にあり、18.0㎝。器形的には１がよりずん胴であり、２はやや下ぶくれで口縁部の屈曲が大きい。器壁の調整は、胴部はハケ、口縁部は横ナデ。内面のハケは板ナデ状にていねいに施され器壁は平滑である。底部外面はヘラケズリ。胎土は細砂を多量に含むが良好で、色調は黄褐色系である。いずれも外面に煤が付着する。

３は長胴甕に移行する段階の甕で、口径16.5㎝、器高推定24.0㎝、胴最大径は胴上半にあり18.0㎝、器壁の調整、胎土、色調ともに１・２に基本的に等しい。外面に煤付着。

５は３より１廻り小形の甕で、口径14.7㎝、器高18.4㎝、胴最大径は胴上半にあり15.4㎝。頸部は口縁部の強い横ナデで段がつく。器壁の調整は基本的に１～３に等しいが、５のみは胴部外面にハケの後ヘラミガキ状の調整を施す。胎土・色調は１～３に等しい。外面に煤付着。

４は高坏坏部である。口径18.2㎝。体部の稜は鈍くあまり明瞭ではない。口縁部は内湾気味である。調整はヘラミガキ。胎土は精良で、色調は赤褐色を呈する。この土器のみ22号住出土。

H23号住居址出土土器（図17－６・７）

６は坩ないし小形の甕である。外面に煤が付いているので小形の甕が適当だろうか。口径14.5㎝、器高10.0㎝。器壁の調整は口縁部が横ナデ、他はナデで、底部外面にヘラケズリを施す。胴外面中央部は剥落部分が一周する。胎土は砂粒を多量に含み、色調は淡茶褐色。

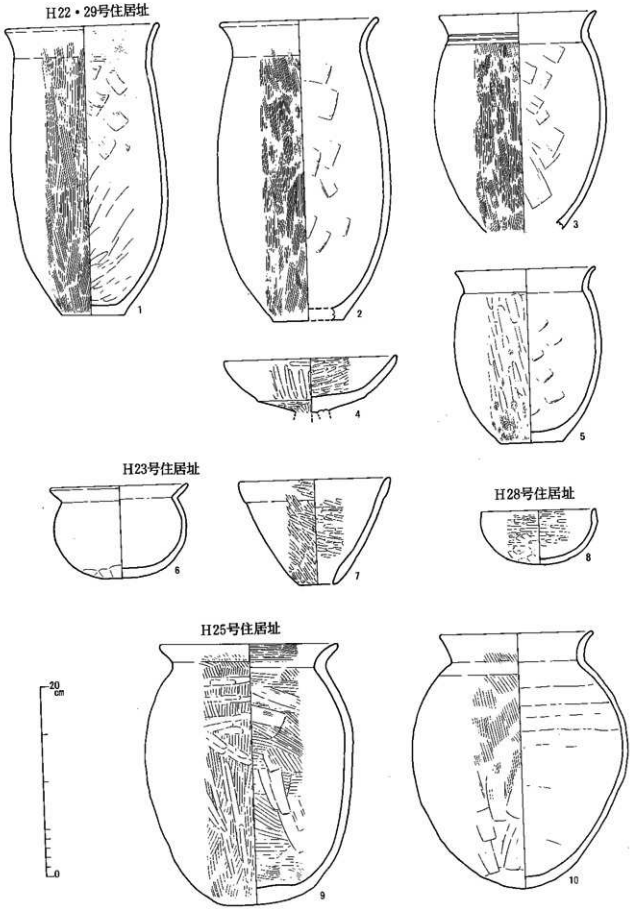


図17　P地点出土古墳時代の土器1　1：4

7は甑である。口径16.0cm、器高11.0cm。口縁部は帯状に肥厚する。器壁の調整はヘラミガキだが、ていねいでなくミガキ残しの部分が目立つ。胎土は砂粒をあまり含まず、色調は赤褐色。口縁部から体部中央にかけて1か所幅9cm、長さ6cmの黒斑がある。

H25号住居址出土土器（図17－9•10、図18－11～18 ）

9は長胴甕に移行する感がある甕で、口径18.9cm、器高17.8cm、胴最大径22.0cm。底部は丸底気味の平底で底ではたたない。調整は全面に粗雑なハケを施し、外面上半に横位の粗いヘラミガキを加える。ヘラミガキはミガキ残す部分の方が多い。胎土は砂粒およびφ5mm程の小石を多く含む。色調は淡茶灰色系。

10は倒卵形の胴をもつ甕である。口径16.1cm、器高17.2cm、胴最大径は胴上半にあり22.6cm。器壁の調整は口縁部が横ナデ、胴外面は条線の浅いハケ、内面はナデで平滑。胴内面には輪積み痕が良く残る。胎土は砂粒およびφ5mm程の小石を多く含む。色調は茶灰色。

11～14は球形の胴部と小さく突出した底部をもつ甕である。11は口径17.6cm、器高27.9cm、胴最大径24.0cm。12は口径15.7cm、器高21.6cm、胴最大径20.4cm。13は口径14.6cm、器高22.7cm、胴最大径21.6cm。14は口径15.1cm、器高20.6cm、胴最大径20.2cm。11～14の特色として分割成形があげられる。胴下半から底部にかけてその痕跡が12•13•14で明瞭である。器壁の調整は12•13 が口縁部は横ナデ、胴部はハケだが、12は胴下半にヘラケズリを加える。12•13のハケは条痕が浅い。13•14は胴外面は条痕が明瞭なハケ、内面はナデで平滑である。胎土はいずれも砂粒とφ5mm程の小石を多量に含む。色調は11•12 が茶灰色、13•14は黄褐色である。

15・16は小形の球胴の甕である。15は口径13.2cm、器高14.4cm、胴最大径16.0cm。16は口径12.4cm、器高11.4cm、胴最大径11.8cm。いずれも口縁部は横ナデ、胴外面はハケ、胴内面はナデ、底部外面はヘラケズリ。いずれも砂粒やφ3mm程の小石を多く含む。色調は15が茶色、16が赤褐色。

17は坏で、口縁部は短く外上方につまみ出されている。平底。調整は外面がハケののちていねいなヘラミガキ、内面はていねいなヘラミガキ。胎土は砂粒を含まず精良で、色調は赤橙色。口径13.7cm、器高5cm。

18は高坏である。坏部の稜はシャープではない。口縁部は外半する。脚柱部は少し中ぶくれだが、基本的には直線的に開く。調整は内外面ともハケからヘラミガキ、胎土は細砂を含むが精良。色調は黄橙色だが、坏部内面は暗灰色から黒色。口径19.1cm。

H26・27号住居址出土土器（図18－19～29 ）

19～22は椀形の坏である。口径12.4cm～13.9cm、器高4.1cm～5.4cm。いずれも扁平で口縁部が内湾するものである。調整は内外面ともにていねいなヘラミガキ。20は内面が黒色処理されている。胎土は細砂を含むが良好。色調は茶色系統である。

23は短く外方につまみ出される口縁部をもつ坏で、内面は黒色処理されている。口径13.3cm、器高6.8cm。調整は口縁部が横ナデで、他はナデ、底部外面にヘラケズリを加える。胎土は細砂を含むが良好。色調は茶褐色。

24は扁平な胴部と短く外反する口縁部をもつ鉢である。口径16.0cm、器高11.1cm、胴最大径17.8cm。調整は外面はハケからヘラミガキで、ヘラミガキは胴上半はていねいだが、底部はミガキ残しがある。内面はていねいなヘラミガキ。胎土は砂粒を多量に含むが良好。色調は赤橙色。

25は小形の球胴甕である。粗雑な作りである。口径14.2cm、器高14.4cm、胴最大径15.6cm。調整は外面が間隔の広い条痕のハケ、内面はナデ。胎土は砂粒を含むが良好。色調は淡茶灰色。

26・27は高坏坏部である。いずれも坏部の稜は明瞭であるが、シャープではない。口径両者とも18.0cm。口縁部はやや内湾気味になる。調整は内外面ともにハケの後ヘラミガキ。胎土は砂粒を多く含むが良好。

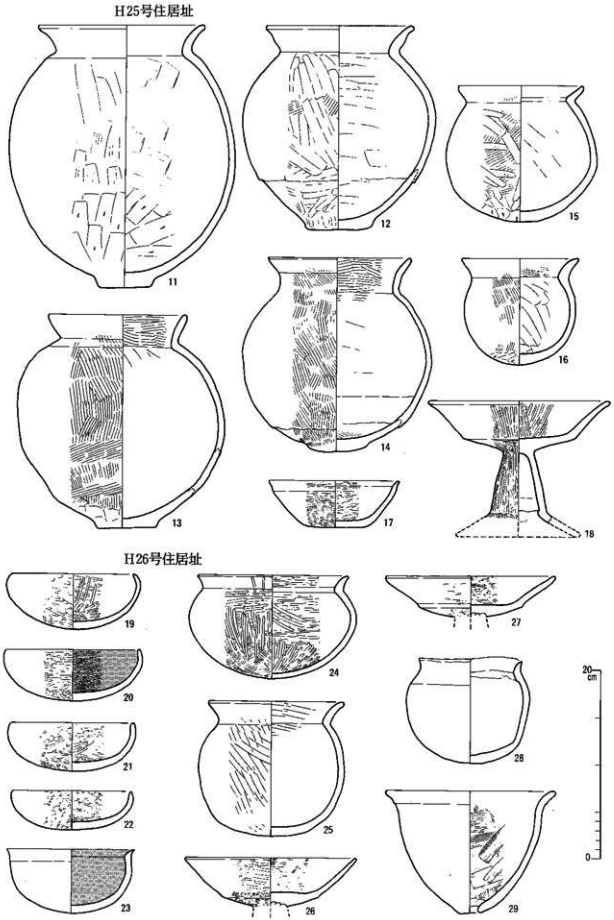


図18　P地点出土古墳時代の土器２　１：４

色調は25が赤橙色、26が黄橙色。

28は球胴の鉢ないし甕である。作りは粗雑である。口径11.0cm、器高11.2cm、胴最大径13.0cm。口縁部は短く外上方につまみ出される。調整は口縁部および胴部内面が横ナデ、他はナデ。胎土は砂粒およびφ2～5mm程の砂粒を多量に含む。

29は甑である。口縁部は折り返されたかのように外方へ外反し肥厚する。口径17.9cm、器高13.1cm。調整は口縁部が横ナデ。胴部外面はナデ、胴内面はハケ。胎土は砂粒を多量に含む。色調は茶色。

H28号住居址出土土器（図17－8）

8は椀形の坏だが、口縁端部はやや外につまみ出されるような形態である。口径12.6cm、器高5.9cm。調整は全面ヘラミガキだが、底部外面はヘラケズリが残っている。胎土は砂粒を含むが精良、色調は赤橙色。

石製品（図19 －1・2）

石製の紡錘車が2点ある。

1はH26号住居址より、2はH28号住居址より出土。いずれも断面台形の薄手のものである。1は質の悪い碧玉製、2は滑石製品と思われるが断定できない。表面はいずれも磨痕が残る。1は直径4.8cm、厚さ1.2cm、重さ33.1g。2は直径4.3cm、厚さ1.0cm、重さ23.9g。

図19　P地点出土石製紡錘車　1：2

小結

これまでの数次にわたる田草川尻遺跡の調査で出土した古墳時代の土器は、和泉式後葉から鬼高式前葉に位置づけられるものが主体であった。今回出土の土器もその中に含まれるものである。

今回出土土器の詳細な検討は別の機会にゆずり、ここでは笹沢浩氏の編年案（「古代の土器」『長野県史』全1巻4　1988）に従って、その年代について述べることとする。

H22・29号住居址出土土器は、若干中ぶくれの長胴甕に移行する形態をもち、かつ長胴甕と調整手法の等しい甕の存在から、長胴甕が普及し始めるⅣ期中段階に比定される。Ⅳ期中段階の年代は、MT15～TK10型式の須恵器との共伴から6世紀前葉から中葉と考えられている。しかし、4の高坏はⅢ期の特色をそなえており、22号住出土土器である。

H23号住居址出土土器は6の鉢の形態からⅣ期古段階に比定される。

H25号住居跡出土土器は、甕は長胴甕に移行する形態のものと、丸胴小突出底部の甕があり、高坏・坏はⅢ期の特色をもっている。従ってH25号住居址出土土器はⅣ期古段階に比定されよう。Ⅳ期古段階はTK208～TK47型式の須恵器が出土するとされている。

H26・27号住居址出土土器は、短く外反する坏と、椀形の坏の存在、かつ坏に黒色土器があること、高坏の形態はⅢ期の特色をもつことなどから、H25号住居址と同様Ⅳ期古段階に比定されよう。

H28号住居址出土土器は、坏の形態からやはりⅣ期古段階におかれよう。

2　平安時代の遺構と遺物

(1)　遺構

A　竪穴住居址

H－24号住居址（図20）

B－5・6グリットで検出。南側2分の1強は20cm前後の深さで攪乱されている。

規模は確認面で、東西に2.4m、南北に2.7mほどの長方形プランとなり、北隅部分でH23住を切っている。内部は礫が多かったが貼床（黒色土）になっていて、掘りこみは16cm前後と浅い。

柱穴は1本の検出にとどまっている。北隅の切りあい部分でカマドが検出され、中から土師器、坏を含め土器片31点が集中して出土した。

(2)　遺物（図21）

平安時代の遺物も多く出土しているが、整理が不充分なので1点のみ報告する。

図21は須恵器の坏である。口径12.6cm、器高3.5cm。体部はやや内湾するものの直線的であり、口縁部は強い横ナデで外反ぎみである。底部外面にロクロ糸切り痕を残す。胎土は精良、色調は灰白色で、軟質である。

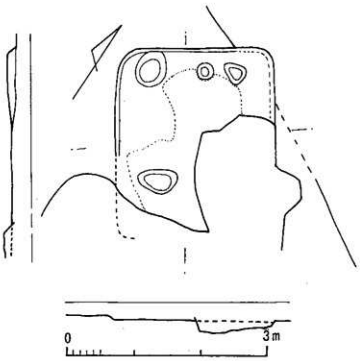


図20　H24号住居址（1：60）

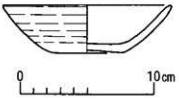


図21　P地点出土平安時代の土器　1：4

B　Q地点

この調査区も礫が多く検出作業が難渋したが、古墳時代の竪穴住居址２軒を検出した。以下遺構説明を加える。

１　古墳時代の遺構と遺物

(1)　遺構

A　竪穴住居址

Ｈ－31号住居址（図24）

調査区の北端で検出した。規模は東西に7.6m、南北に5.2mだが北側は調査区外になっている。確認面より深さ25cmの掘りこみになっていて、西から南にかけて周溝がめぐり、南寄りに位置する柱穴２本があり、深さは床面より40cmと亀甲している。主柱穴とみたい。

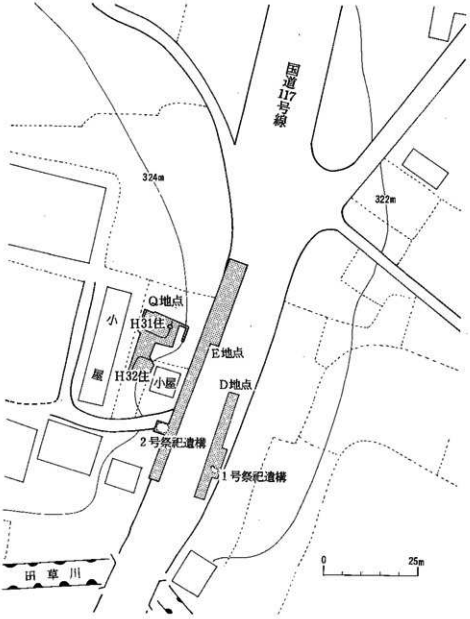


図22　Q地点調査区及びD・E地点（1972）祭祀遺構位置（１：500）

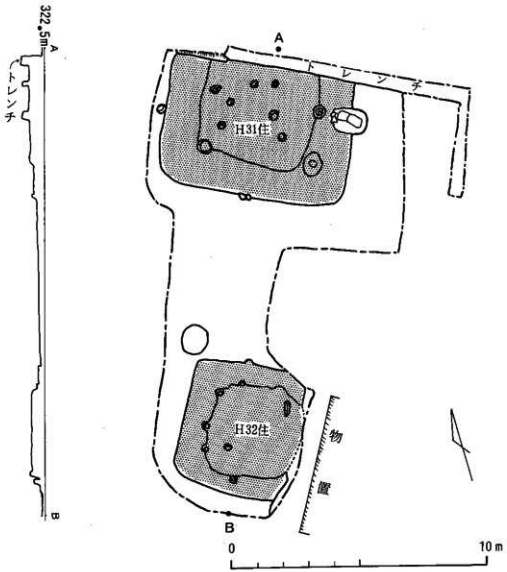


図23　Q地点遺構全体図（1：150）

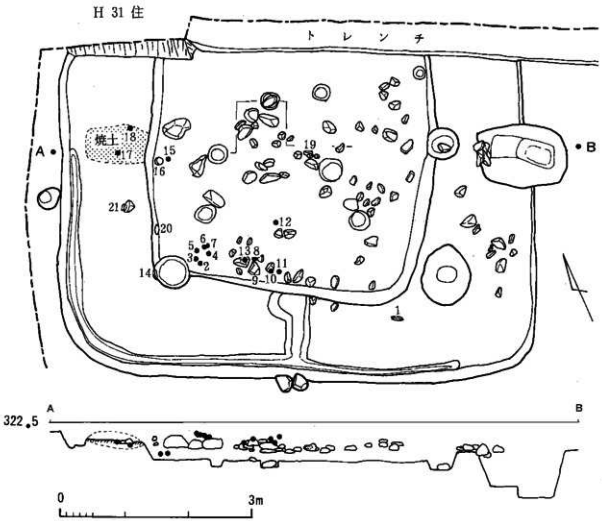


図24　H31号住居址（1：30）

炉は西側の中ほどで検出、焼土の中から数片の土器片と、すぐ右側でコシキ1箇体が一部欠損して出土している。東側80cmの土坑からは少量の土器片が検出されている。全体に礫が多く入っている。

（本住居址は2軒の重複とも考えられるが、詳細な検討は行うことができなかった。）

中央部には、15cmの深さをもつ方形の竪穴遺構があって少量の土器片が検出されている。南側に寄って2本柱穴は主柱穴とも思える。遺物は土器片少量が検出されている。

H－32号住居址（図25）

調査区の南端で検出。規模は南北に5.2m、東西は4.5mまで確認できたが、それ以上は攪乱されている。床の確認面までは6cmと浅い。中央には床面からさらに40cmの深さの方形遺構があり、東・西コーナーを中心として周溝がめぐる。ピット状遺構を有する住居址と考えられる。また、この遺構の南端から小礫を丹念に敷並べたような箇所があって、その小礫の間からは、潰れた甕などの土器片が検出され、1点ではあるが刺突紋6条の入った直径1.8cmの球状で貫通する穴を有した土製品を検出、さらに小礫の下からほゞ完形の鉢形土器3～4箇体のほか、土器片も相当量検出されている。

柱穴の検出もあるが、主柱穴はなかった。

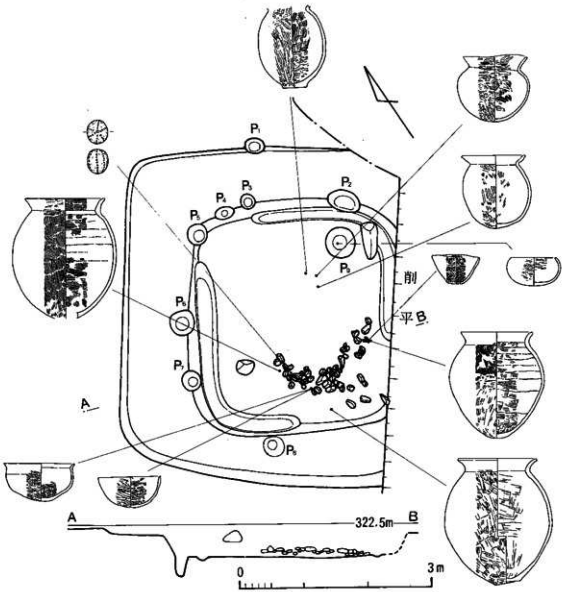


図25　H32号住居址（1：60）

(2) 遺物

古墳時代の遺物は、H32号住居址およびH31号住居址出土品の一部を報告する。報告する一部も十分な整理をした上での一部ではなく、完形に近く復元できた土器の一部と土製玉であり、住居址の器種構成を示すものではない。

H32号住居址出土土器・土製品（図27－1～11、図26）

1～3は坏である。1は口縁部が短く外反する坏で、口径16.4cm、器高8.9cm。口縁部内外面は横ナデ、他はナデの後ヘラミガキ。底部外面はヘラケズリ。ヘラミガキは粗くミガキ残しがある。胎土に砂粒を多く含み赤褐色を呈する。

2・3は椀形の坏である。2は作りが粗雑で、口唇部が波うつ。口径14.6cm、器高7.2cm。調整は内外面ともにハケののちヘラミガキで、ヘラミガキは粗い。3は口径10.4cm、器高6.6cm。器表の剥落がはげしいが、作りは2よりていねいである。両者とも砂粒を少量含み、色調は茶褐色系。

なお、2には籾圧痕がある。

4～6は倒卵形の胴部と短く外反する口縁部をもつ中形の甕で、4は小さな平底、6は丸底をもつ。4は口径18.5cm、器高29.8cm、胴最大径25.2cm。5は口径18.6cm、器高推定28.4cm、胴最大径24.2cm。6は口径16.9cm、器高25.2cm、胴最大径22.4cm。いずれも粘土紐の輪積み痕が内面に明瞭に残る。調整はいずれも口縁部は横ナデ、胴部はハケ、外面胴部下半から底部にかけてヘラケズリ。5のハケは条痕が深く、4・6は浅い。胎土は砂粒を多量に含み、色調は茶褐色系。

7は下ぶくれの長胴と突出した平底をもつ小形の甕で、口縁部は欠く。頸部までの器高19.0cm、胴最大径16.0cm。調整は内外面ともにハケののちヘラミガキ。底部外面はヘラケズリ。胎土は砂粒をほとんど含まない。色調は茶色。

8は球形の胴部と短く外反する口縁部をもつ小形の甕で、外面に煤が多量に付着している。口径14.9cm、器高17.4cm、胴最大径16.0cm。調整は口縁部が横ナデ、胴部外面はハケからヘラミガキ、内面はハケ。胎土に砂粒およびφ5mm程の小石を多量に含み、色調は淡茶褐色。

9は肩の張る扁平球形の胴部とやや長く外反する口縁部をもつ小形の甕で、胴外面に煤が多量に付着している。作りはていねいで器壁の厚さも薄く仕上げられているが、口縁部は波うちややいびつである。口径14.7cm、器高15.5cm、胴最大径17.0cm。調整は全面ハケののちていねいなヘラミガキ。胎土は砂粒をあまり含まず、色調は淡茶褐色。

10は球形の小形の甕で、作りは粗雑である。器壁は厚い。頸部までの器高11.0cm、胴最大径13.4cm。調整は内外面とも条痕の不明瞭なハケ。胎土は砂粒およびφ3～5mmの小石を多量に含む。色調は淡茶色。胴中央が縦に大きくヒビ割れている。外面に煤が付着している。

11は、甑であり、粗雑な作りでいびつである。口径11.2cm、器高7.0cm。口縁部は波うつ。調整は全面ハケからヘラミガキ。胎土は砂粒をあまり含まず、色調は暗茶色および黒色。

これらの土器は坏に口縁部が短く外反するものと椀形の両者があるが、黒色土器がないこと、長胴甕がないことなどから、和泉式末葉、『長野県史』Ⅲ期新段階からⅣ期古段階にかけての時期（笹沢浩「古代の土器」『長野県史』全1巻4　1988）と考えている。

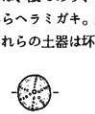


図26はH32号住居址出土の土製の玉である。縦19mm、横17mmのやや楕円形を呈し、中央に貫通する穴があいている。表面には細い櫛状工具による刺突文が6列施されている。重さ5.5g。

図26　Q地点出土土製玉1：2

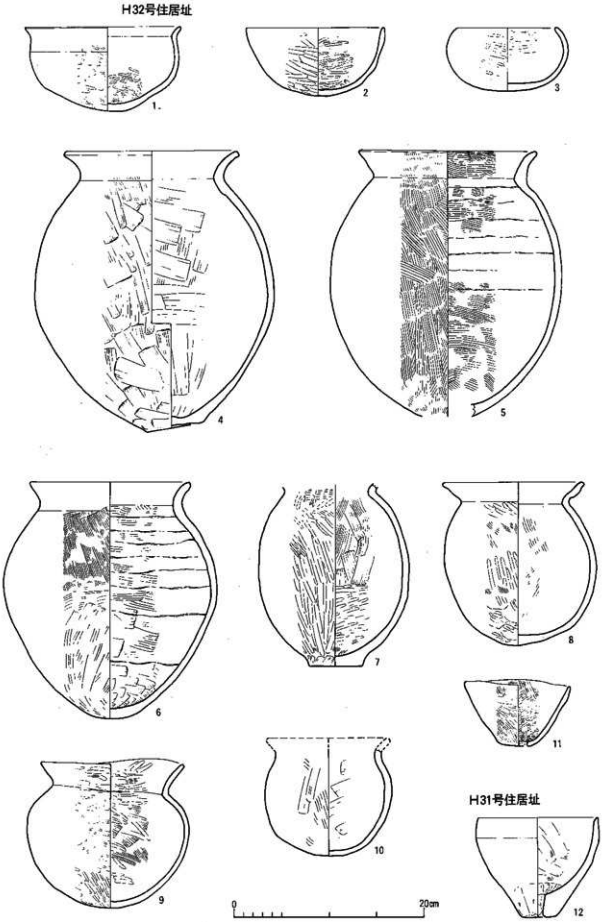


図27　Q地点出土古墳時代の土器　1：4

H31号住居址出土土器（図27－12）

12は甑である。H32号住居址出土品に比べて作りがていねいで、均整がとれている。口径12.8cm、器高10.6cm。調整は口縁部が横ナデ、他はていねいなナデである。胎土は砂粒を多く含み、色調は明るい茶色。

第4章　まとめ

田草川によって形成された扇状地扇端面に位置する田草川尻遺跡は、松澤芳宏氏の詳細な調査で縄文時代前期から中世にまたがる大複合遺跡として知られている。昭和40年代末、この遺跡地を縦断して国道117号線静間バイパスが開通した。開通以後遺跡所在地域内の開発が急ピッチで進み、そのたびごとに発掘調査が行われた。昭和47年の第１次調査を皮切りに今回で８回を数えるにいたっている。

昭和52年の第２次調査では、弥生式後期の良好な遺構、遺物が発見され、千曲川下流域の弥生後期前半の編年編成に重要な資料となった。また、古墳時代では、鬼高式併行期の遺構、遺物が多く発見された。中でも住居址は大型で規則的に建てられており、古代信越交通路を考える上で重要な場所であることを私達に示してくれた。いずれにしても、田草川尻遺跡は、既出の遺構、遺物からみて飯山地方の原始、古代の研究にとって最重要な地位を占める遺跡であることはいうまでもあるまい。今回の調査は、静間バイパス西方－田草川をはさんで、南北の２地点で行われた。Ｐ地点では、古墳時代の住居址７軒、平安時代住居址１軒の発見があった。Ｐ地点は、第２次調査の折に発見された古墳時代住居址の西側に連なるようにして発見された。厳密にいえば若干のズレはあろうか。鬼高期併行の住居址は、ほぼ東西に並列する形で存在することが、今回の調査を通して理解でき得た。何故にほぼ東西に並列して住居址が構築されたのかは今後の研究課題といえるであろう。Ｑ地点においても古墳時代の住居址が２軒発見された。この地点に近接してかつて祭祀遺構が発見されており、今回の遺構、遺物の出土状況も、一般的に検出される遺構、遺物の状況とは異なるように思えた。田草川尻に住居を構えた古墳時代の人々にとって、Ｑ地点を中心にした場所は、神への祈りの場所であったのではなかろうかと想像させられるような遺物の出土状況であった。

いずれにしても、今回の調査を含めて発見された本遺跡の遺構、遺物は、飯山地方の原始、古代の歴史を究明する上に大変重要な資料を私達に提供してくれた。反面、一本の幹線道路が、開通することによりその周辺がとてつもなく急ピッチで開発され、そのたびごとに私達の祖先の残した貴重な文化遺産が、失われてゆくのだという貴重な体験も学ぶことができた。過疎化が進行する地域には、地域の活性化のための開発は必要不可欠なことかも知れない。しかしながら、そのたびごとに私達の祖先の残した重要な文化遺産が失われていくのだということも忘れてはならないであろう。今、飯山地方には、いくつかの生活道路敷設の計画があるときく、そして現に敷設中の道路もある。私達は、静間バイパスの敷設から多くのものを学ぶことができた。今後、これを地域の文化財保護に生かしていきたいと思っている。それにしても、一本の道路の開通が、これほど埋蔵文化財の消失に拍車をかけるとは開通時点では思ってもみないことであった。今、思えば見通しが甘かったといわれても仕方がないことである。

飯山市を中心とする岳北地方は、今地域活性化のための開発とそれにともなう埋蔵文化財の破壊消失という重要な命題を真剣に考えていかねばならない岐路に立たされているといえよう。また、地域住民が、お互いに知恵を出し合って地域の活性化と埋蔵文化財を含む文化財の保護保存と活用を緊急にして、しか

も慎重に考える時にあたっているといえないだろうか。今回の田草川尻遺跡の調査は、そのことを私達に教えていると思えてならない。

末尾ながら今回の調査にあたって、ご指導賜った県文化課、調査に理解を示され積極的に協力された株式会社ヤブハラさん、大塚清次さんに心よりお礼申上げるとともに、発掘調査に従事された作業員の皆さまに深い感謝の念を捧げる次第です。

PLEAT

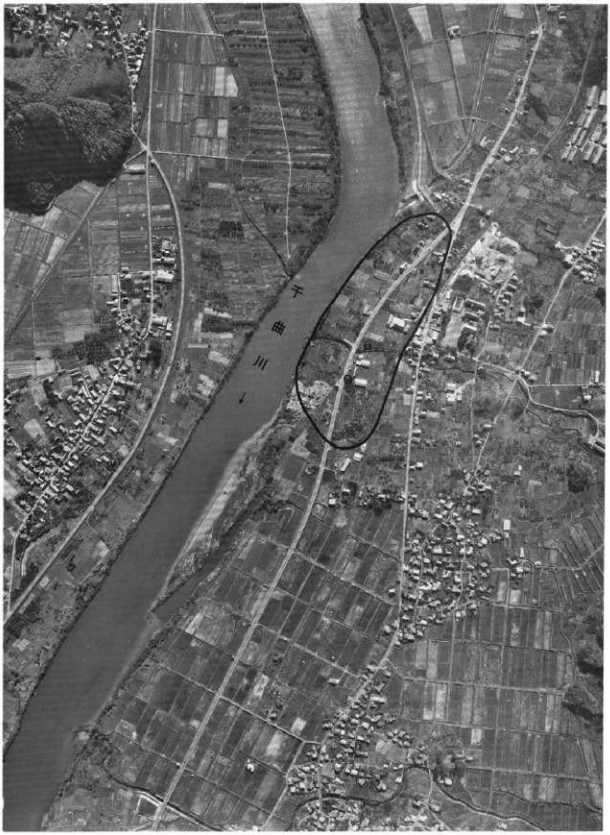


写真1　田草川尻遺跡航空写真

千曲川が悠々と流れる。対岸の岩井地区には広い沖積地が広がっている。遺跡付近は、田草川の扇状地のために水田はなく、南北に圃場整備された整った田んぼが並んでいる。写真は下が北である。

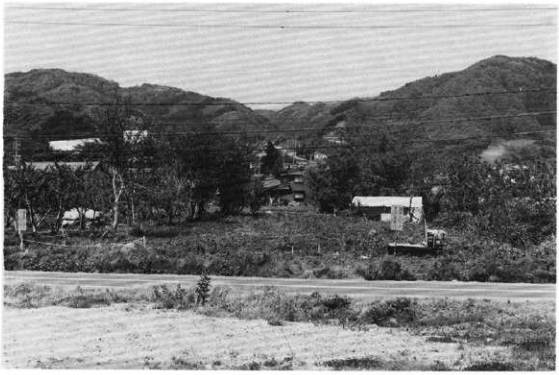


写真 2　P地点近景

写真 3　調査区伐採後の状況

写真4　重機による表土除去作業

写真5　遺構確認作業

写真6　調査風景

写真7　市議会総務文教委員による視察

写真8　平板測量風景

写真9　レベル読み取り作業風景

写真10　遺物レベル作業風景

写真11　調査区全景

写真12　Ｈ22・２３号住居址（西より）

写真１３　H22･33号住居址完掘状況

写真14　H33号住居址カマド

写真15　H22号住居址カマド

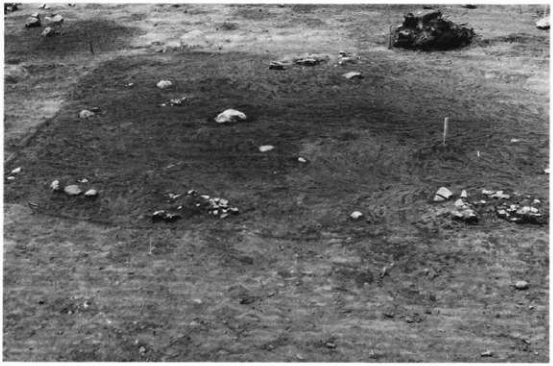


写真16　H23号住居址確認状況（北より）

写真17　H23号住居址（北より）

写真18　H24号住居址確認状況（上の黒い部分はH23号住居址　南東より）

写真19　H24号住居址カマド

写真20　H25号住居址遺物出土状況

写真21　H25号住居址（東より）

写真22　H26•27号住居址（南より）

写真23　H26•27号住居址遺物出土状況（南より）

写真24　H26号住居址紡錘車出土状況

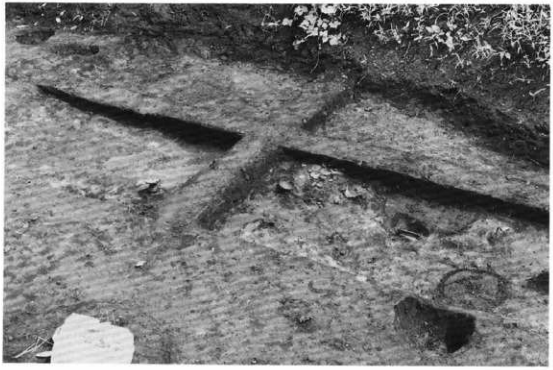
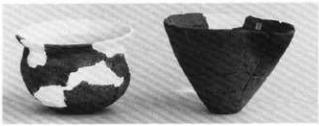


写真25　H28号住居址（南から）

写真26　H28号住居址（西から）

H22住

H29住



H23住

H25住

H25住

H26住

H28住

H24住

写真28　P地点出土遺物 2

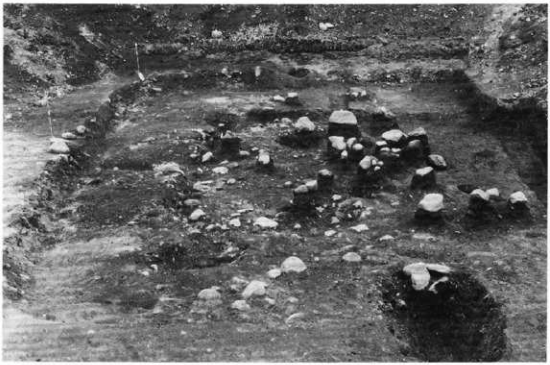


写真29　Q地点　H31号住居址（東から）

写真30　H32号住居址（西から）

写真31　H32号住居址　遺物出土状況

写真32　H32号住居址　遺物出土状況

写真33　H32号住居址　遺物出土状況

H31住

H32住

写真34　Q地点出土遺物

飯山市埋蔵文化財調査報告 第33集

田草川尻遺跡Ⅷ

平成4年3月25日　印刷
平成4年3月30日　発行

編集・発行　飯山市教育委員会
飯山市大字飯山1,110－1

印　　刷　㈲足立印刷所
飯山市大字常郷581－1